開催地名：徳島県藍住町	
開催日時	令和 4 年 11 月 29 日（火）　13：30　～　14：30
開催場所	藍住町立藍住中学校
語り部	武藏野　美和　（岩手県陸前高田市）
参加者	藍住町立藍住中学校生徒　167 名
開催経緯	当町では、南海トラフ巨大地震による地震動や一部地域での津波被害が想定されており、ハザードマップ、津波避難計画等を作成し、訓練等を通じて住民の防災意識の向上を図っている。しかしながら、当町では大規模な災害の被災経験がないため、住民の防災意識が低調となっている。特に、若い世代においては、東日本大震災等の大規模災害をリアルタイムで見聞していないため、さらに防災意識が低い状況となっており、その向上が課題となっている。
内容	（１）震災発生時の陸前高田市について 私が住んでいるのは、岩手県陸前高田市という、人口約 1 万 8,000 人ほどの小さな市である。（震災前の人口は約 24,000 人）岩手県の中では比較的温暖な地域で、陸前高田市の象徴とも言える白砂青松の高田松原は、市民はもとより県内外の来訪者からも愛される場所だったが、約 7 万本と言われる松は、「奇跡の一本松」以外ほとんどが流されてしまった。海岸沿いに面した部分が少なく、市の中心に大きな川が通っており、かつて川から中州が生まれ、そうしてできた平野に人が住み始めたことで栄えた歴史があり、震災時は川の近くに市役所や図書館、学校といった主要な建物や住宅が集中していた。そして、残念ながら災害防止に繋がる対策は講じられていなかった。 （２）東日本大震災時の状況 2011 年 3 月 11 日の午後、マグニチュード 9.0 の大きな地震が発生した。陸前高田市の震度は 6 弱で、約 160 秒揺れ続けた長い地震だった。地震そのものより、しばらくしてからやってきた津波による被害が大きかった。東日本大震災の死者の 95 パーセントが津波による溺死だと言われている。津波の恐ろしさは、いろいろなものを破壊しながら、水が塊で襲ってくるところだ。地震発生から 40 分ほど経った頃、気仙川を火事のような煙と砂埃を上げながら津波が遡り、市役所や消防署などの公共施設は全壊した。 川の近くに建物が集中していたことから、津波を予測して真っ先に高台や建物の屋上へ逃げた者は難を逃れたが、多くの市民が地震の揺れで倒れたり落ちたりしたものを片づけている最中に津波に遭遇し、巻き込まれて犠牲になった。子どもたちは学校で避難して無事でも、家にいた家族が津波に巻き込まれてしまったケースも多く、陸前高田市だけで 32 名の震災孤児も発生した。行方不明者を含む死者の数は 1,758 人に及び、11 年半が経過した今でも、202 人の人たちが行方不明となっている。 この経験を通して、私はひとりひとりが「災害が起きたらどう動くか」ということを常に考える意識が大切だと強く感じた。住んでいる場所や、置かれている状況を見て、どう避難するのが安全なのか、一人一人自分で考えることが大切である。また、防災に関して自分たちが

	学んだことや得た情報を、地域の人たちに伝えていくことによって、災害発生時により多くの命が救えるということを覚えておいてほしい。 （３）災害に対する心構え 　自分の命を奪ってしまうもの、もっと広く言えば、自分や家族の笑顔を奪ってしまうもの、そのすべてが災害である。命や生活を脅かすものすべてを災害ととらえ、そして、これらの災害を防ぐことが「防災」だと意識してほしい。交通事故や新型コロナウイルス感染については、工夫することで未然に防ぐことができるが、地震や洪水などの自然災害については、いつ起こるかわからないうえ、発生を止められない。それでも、自分の命は自分で守ることが鉄則なので、自分の住む地域の災害リスクをハザードマップなどで知ることは必要であるし、以前の津波や洪水の被害について知ることも大切なことだ。 　近年は地震や台風などの自然災害が増えてきていることから、非常時持ち出し袋を準備するなどして、１次防災や２次防災の備えをしている人は多いかと思うが、自分にとって大事なものをいつでもに持ち出せるようにしておくことも重要だ。外出中に災害が発生した際に、外出先から自宅や避難所まで安全に移動するための助けになる備えを０次防災と言い、０次防災用のグッズを普段使用しているバックに入れておき、常に持ち歩くことが推奨されている。０次防災への意識は、緊急事態での安全と衛生を確保するために必要な、言わば生きるための基礎となりうる。みなさんが毎日マイボトルを持ち歩くことも０次防災の一つと言える。日頃から「万が一」を考え、自分の命を守るための「備え」を意識してほしい。自分にとって必要なものについては、自分で備える必要がある。
開催地より	経験者による具体的なお話しを聞くことで、生徒たちは災害の具体的なイメージをつかむことができたと思う。今日のお話しを受けて、学校としては若年層からの防災意識向上と自助・共助の推進しての体制強化に取り組んでいきたいと思う。